

フランス語とルーマニア語における拡大与格について

Datifs étendus en français et en roumain

林 博 司

Hiroshi HAYASHI

1. 拡大与格とは

拡大与格というのは Leclère(1976)の用語で、次の例のように、述語によって選択されない（つまり、文の必須の要素ではない）与格のことを言う。（以下の例では、フランス語の例に関しては原則的に訳を付けず、ルーマニア語の例には単語レベルの訳と必要に応じて全訳を付けることにする）。

(1) On lui a cassé sa vaisselle.

述語である *casser* の項構造は [AGENT, <THEME>]（括弧は内項を示す）であり、それぞれ *on* と *vaisselle* が占めており、与格の *lui* はその外にあって、言わば浮き上がった状態にある。にもかかわらず、この *lui* は問題なく意味的に統合される（つまり、問題なく解釈される）。もちろん項構造に含まれない要素が「浮き上がらず」全体に統合される現象は何も珍しいことではない。場所表現、時間表現などはその典型的なもので、他に様態表現、道具表現などいくらかも挙げることができる（但し後者二つは述語の意味にかなり依存しているが）。しかし、拡大与格の特異な点は、その出現に対する制約がきつく、しかも言語によってそのきつさにも差があるという事実にある。例えば次の例に見られるように、フランス語はかなりきつい制約を課すのに対して、ルーマニア語では制約はかなり弱い。

(2) *Je lui ai regardé son tableau.

(3) *Je lui sais son nom.

(4) I-am văzut pictura.

DAT-J'AI VU TABLEAU-LE

(5) Îi știu numele.

DAT JE SAIS NOM-LE

また、特にフランス語では、次の様な、身体部分と一緒に出てくる与格を所有の与格 (*datif possessif*) と呼んで、拡大与格と区別することができる。

(6) La mère lui a lavé les mains. (Jones(1996), 以下J)

(7) Jules lui a tiré les cheveux. (J)

確かに拡大与格と所有の与格との間にはいくつかの相違点が見られるが（例えば、代名詞形と à

+NP形の許容度の違い、あるいは被所有物に付く所有形容詞と定冠詞の違いなど — 具体的には井口(1989)を参照されたい)、ルーマニア語では差異が殆ど見られないし、述語によって選択されない項である与格形が意味的に全体に統合されるという本質的な性質は同じであり、さらに、後で見るように、両者の違いは所有形態の違い — 即ち、分離可能所有(*possession aliénable*)と分離不可能所有(*possession inaliénable*) — に起因すると考えられることから、本稿ではこの両者を共に拡大与格と呼んで、区別しないことにする。

2. 基本的データ

前節で少し触れたように、フランス語はルーマニア語に比べて、拡大与格に対する制約が格段に強いことが知られており、この制約を動詞の受影性 (*affectedness*)の観点から説明しようとする研究が多い(例えば Authier & Reed(1992), Herschensohn(1990), Barnes(1985), 大木(1989), Shibatani(1994)など)。受影性による説明には問題があることは林(1996, 1998)で指摘したのでここでは繰り返さないが、この制約が動詞の語彙的意味と強い相関関係があることは容易に想像がつく。そこでここでは Vendler(1967)の、アスペクトに基づく動詞の4分類に従ってフランス語、ルーマニア語の拡大与格の分布を調べてみよう。

<状態(State)>

(8)a. *Tăurenciu s'est étonné que le vieux lui sache son nom.

b. Tăurenciu era uimit că moșul îi știe numele.

ETAIT ETONNE QUE VIEUX-LE DAT SACHE NOM-LE

(9)a. *Toute la maison lui est pleine de trésors.

b. Toată casa i-e plină de odore.

TOUTE MAISON-LA DAT-EST PLEINE DE TRESORS

<到達(Achievement)>

(10)a. *Le vase lui a cassé.

b. Vasa i s-a spart.

VASE-LE DAT SE-A CASSE

(11)a. *L'impôt sur son revenu lui a augmenté. (Authier & Reed(1992) 以下 A&R)

B. Impozitul pe venit i-a crescut.

IMPOT-LE SUR REVENU DAT-A AUGMENTE

<達成(Accomplishment)>

(12)a. Jean lui a cassé son verre.

b. Ion i-a spart paharul.

DAT-A CASSE VERRE-LE

(13)a. La mère lui a coupé les cheveux.

b. Mama i-a tăiat părul.

MERE-LA DAT-A COUPE CHEVEU-LE

<活動(Activity)>

(14)a. *Son bébé lui a pleuré toute la nuit.

b. Copilaşul i-a plâns toată noaptea.

BEBE-LE DAT-A PLEURE TOUTE NUIT-LA

(15)a. *Jean s'est agité la main.

b. Ion şî-a mişcat braţele.

DAT-A AGITE MAIN-LE

以上見たように、フランス語では制約がきつく、適格なのは達成動詞を述語とする文に出現する拡大与格のみである（形容詞を述語とする文は、形容詞が本質的に状態性を持つので適格にはならない）。他方ルーマニア語では全てのタイプの動詞を述語とする文に拡大与格は出現できる。もちろん、形容詞文もOKである。

(16)a. *Le cheveu lui était gris.

b. Părul îi era cărunt.

CHEVEU-LE DAT ETAIT GRIS

問題は、フランス語については、拡大与格が達成動詞を述語とする文にしか出現できないという事実が何を意味しているか、ということであり、ルーマニア語については、本当に拡大与格については何の制約もないのか、ということである。この問題については、各々、第3節、第4節で取り扱うことにする。

3. フランス語の場合

紙数の関係上、フランス語、ルーマニア語の両方について十分な議論をする余裕がないため、フランス語については林(1998)で詳しい議論を行っておいた。そこで本節においては、ルーマニア語との比較・対照を行う上で必要、最小限度の事柄のみを述べるに留めたい。

フランス語の拡大与格に関する議論の上で有効な記述装置として語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, 略して LCS) を採用したい。これは抽象的な意味関数を用いて、語彙の意味構造を分析しようとするもので、最近では、前節で取り上げた Vendler のアスペクトの研究との関連において急速な発展を見せている。意味関数の種類、数、そして表記法も研究者によっていろいろ異なり、それに応じて理論的背景も異なるのだが、本稿では Jackendoff(1990) に基づいた影山(1996)、影山・由本(1998)の表記法を用いることにする。その基本的シェーマは次の通りである（大文字のうち、ACT, ON, BECOME, BE, AT, CAUSE などの英語の動詞や前置詞に対

D A T < i >

この仮説は、その帰結として、二次叙述の無い文には拡大与格は出現できないこと、また、拡大与格のある文には必ず二次叙述が存在すること、を予測する（但し、二次叙述があっても、必ずしも拡大与格が出現するとは限らない）。これによって、状態、到達、活動の3タイプの動詞を述語とする文には拡大与格は不適格であることが説明できるし、次の様な問題も説明できる。

(17) La petite boule de neige lui a fondu sur l'épaule. (Barnes(1985), 以下B)

(18) La crème lui a coulé sur la tête. (B)

これらの文の述語は(10), (11)と同じく到達動詞であり、二次叙述の部分が無いので不適格のはずである。我々は、この場合には一種の「変則的」二次叙述が存在する、と考える。(17)を例にとると、雪は溶けて水になるが、この場合、その水が肩に残って肩を濡らし、そのことによって肩の所有者である拡大与格で表されている人物が何らかの反応を示す、というプロセスが自然に推論できる。肩が濡れることが拡大与格の出現を正当化することは、次の例が適格であることから確認できる。

(19) Je ne veux pas me mouiller les vêtements.

従って、(17)の LCS は次の様に表すことができる。

[neige BECOME [neige BE AT WATER] CAUSE [BECOME [WATER BE AT SURFACE OF épaule<i>]]]
 ↑
 D A T < i >

このシェーマは、[CAUSE] の左辺に [ACT] が無い、という点でプロトタイプからずれており、その分特別な制約が必要になる。それは<i>に対する制約である。次の例が不適格なことから、「<i>は分離不可能所有関係に限る」という制約を付け加える必要がある。

(20) *La petite boule de neige lui a fondu sur son bureau.

次の様な活動動詞の場合も、同じように考えることができる。

(21) Il se brosse les dents.

(22) Jules lui a tiré les cheveux. (=7)

具体的な議論は省略するが、(21), (22)にも二次叙述が想定でき、それが拡大与格を認可していると考えられる。

(21') [il ACT ON dents] CONTROL [dents<i> BECOME [dents<i> BE AT CLEAN]]²⁾
 ↑
 D A T < i >

(22') [Jules ACT ON cheveux] CAUSE

[cheveux<i> BECOME [cheveux<i> BE WITH EFFECT ON []]]³⁾

両方とも、二次叙述の部分は、先の(17)の場合と同様、プロトタイプからずれた「変則的」なものなので、特別な制約が必要である。即ち、(21)には分離不可能所有関係、(22)には分離不可能所有関係に加えて [BE WITH EFFECT ON] の対象が拡大与格と同一指示でないといけない、という条件が加わっている。

このように、フランス語の拡大与格は、二次叙述という概念を導入することによって、その出現条件やその本質を説明することができる。

4. ルーマニア語の場合

一般にルーマニア語では拡大与格の出現は殆ど制約がなく、あらゆる述語と共存可能だ、といわれている（例えば Timoc-Bardy(1996) など）。そして第2節で見たように、それは正しいように思える。しかし注意深くデータを観察すれば、必ずしもそれは事実ではないことに気付く。

(23) *I-am mers spre casă.

DAT-J'AI MARCHE JUSQU' A MAISON (私は彼の家に向かって歩いた)

(24) *I-am ieșit din casă.

DAT-J'AI SORTI DE MAISON (私は彼の家から出た)

(25) *I-am coborît din mașină.

DAT-J'AI DESCENDU DE VOITURE (私は彼の車から降りた)

あと、alerga (走る)、inota (泳ぐ) などがある。これらの動詞に共通しているのは、活動タイプの中でも位置変化を表す意味を持っているということである。例えば(23)の LCS は次の様になろう。

(23') [eu ACT] CAUSE [eu MOVE TO casă]

ここで [[ACT]CAUSE] というシェーマをもっているのは、意思がなく独りで動く場合と区別するためである（影山(1996)参照）。さて、問題は「何故 [MOVE] タイプは拡大与格を拒否するのだろうか、また、[MOVE] タイプと [BECOME] タイプはどこが違うのだろうか、ということである。

フランス語では、拡大与格は二次叙述としか関係を結ばなかった。二次叙述は当然のことながら一次叙述を前提とする。つまり、何かが起こって、その結果の変化・状態と拡大与格が関係を結ぶ、ということである。他方、ルーマニア語は、第2節で見たように、二次叙述とは無関係に、拡大与格はすべてのタイプの述語と共起するように拡張・一般化されているが、活動タイプの部分への拡張・一般化がまだ不十分だ、ということになる。それでは「何故 [MOVE] タイプは拡張を拒むのか」といふと、それは [MOVE] は位置変化であり、動作志向であるからだと考えられる。それに対して、フランス語で達成タイプがプロトタイプであったこと、フランス語、ルーマニア語

とも拡大与格は直接目的語と優先的に関係を結ぶが、直接目的語は本質的に結果を作り出す働きを持つ（以下の直接目的語を巡る議論を参照）こと、から、拡大与格は本質的に状態変化を主とする結果志向だと考えられる。⁴⁾ もしこの考えが正しければ、[MOVE] タイプに着点志向の解釈が可能になるような操作を加えれば適格性は増すはずである。次の例で分かるように、事実はそのとおりである（フランス語でも、着点における存在が二次述語を保証することになり、適格になる）。

(26)a. OK/? I-am intrat în casă.

DAT-J' AI ENTRE DANS MAISON

b. OK/? Je lui suis entré dans sa maison.

また、家の部分を分離不可能所有関係にある身体部分に置き替えると全然問題はなくなる。

(27)a. 0 insectă mică i-a intrat în gură.

UNE INSECTE PETITE DAT-ELLE A ENTRE DANS BOUCHE

b. Un petit insecte lui est entré dans la bouche.

しかし、この考えに対しては、反例がすぐ見つかる。それは第2節の(14), (15)である。

(14) Copilașul i-a plâns toată noaptea.

(15) Ion și-a mișcat bratele.

これらは全て状態変化、着点志向ではない。(14)は動作そのもので着点(終結点)は考えられないし、(15)は典型的な位置変化でしかも着点がない。これらと [MOVE] 型との違いをどう説明したらよいか。まず先に(15)タイプから考えよう。これと先ほどの [MOVE] タイプとの大きな違いは、前者は他動詞で後者は自動詞だ、ということである。一般にルーマニア語では、拡大与格と関係づけられる要素は直接目的語が圧倒的に多いと言われており（例えば Popescu-Ramírez & Tasmowski-De Ryck(1988), Timoc-Bardy(1996)など、またフランス語でも同様の分布が観察される）、⁵⁾ 直接目的語が文中に存在すると、それとの所有関係が優先的に樹立されて、拡大与格が認可されるケースが多い。[MOVE] 型でも他動詞の場合は適格性が上がる。

(28) I-am împins un cărucior spre casă.

DAT-J' AI POUSSE UN CHARIOT JUSQU' A MAISON. (私は彼の手押し車を家まで押した)

この、適格性の向上は、直接目的語の持つ“delimitation”の機能 — 直接目的語は動詞の動きを「区切る」動きをする — によるものと考えられる。紙数の関係でこの問題については議論できないが、詳しくは Tenny(1987, 1994)を参照されたい。(28)では、直接目的語に不定冠詞が付いているが、それでも与格と関係を結べる。⁶⁾ また、(15)では直接目的語に身体部分がきているが、非身体部分(分離可能所有関係)でも適格性には変わりはない。

(29) Ion și-a mișcat patul.

DAT-A BOUGE LIT-LE (イオンは自分のベッドを動かした)

(30) I-am mișcat toiaġul.

DAT-J'AI AGITE BATON-LE (私は彼の杖を振った)

ここで直接目的語の無いケース、つまり自動詞構文の拡大与格の係り先について少し考えてみたい。自動詞には二つのタイプがある。活動タイプと到達タイプである。⁷⁾ 前者にはさらに[MOVE]タイプと非[MOVE]タイプがあり、[MOVE]タイプでは、先に見たように((23)~(25))、拡大与格はPP(前置詞句)があってもそれと関係を結べないし、次の例でわかるように主語とも関係を結べない。

(31) *Copiii i-au alergat în culoar.

ENFANTS-LES DAT-ONT COURU DANS COULOIR (子供たちは廊下で走り回った)

(32) *Pasarea i-a zburat în brațe.

OISEAU-LE DAT-A VOLE DANS BRAS (鳥が彼の腕の中に飛んできた)

それに対して、非[MOVE]タイプでは、主語とは関係を結べないもののPPとは関係を結ぶことができる。

(33) Musafirul mi-a dormit în pat.

VISITEUR-LE DAT-A DORMI DANS LIT (客は私のベッドで寝た)

インフォーマントによると、この「客」は結果的には「私の客」だが、与格形“mi(îmiの縮約形)”は“pat”と関係を結ぶ。もし「私の客」を文法的に表したければ“Musafirul-mi”、または“Musafirul meu”⁸⁾としなければならない。しかしそれは文法的には正しいが、かなりくどい表現になる、とのことである。つまり、少なくとも文法的には、主語は拡大与格とは関係を結べない(他動詞は直接目的語があるので、当然主語とは関係を結べない)、ということになる。もちろん、拡大与格の関係先は何か、というのは語用論的要因に大きく左右されるし、Popescu-Ramírez & Tasmowski-De Ryck(1988)で詳しく考察されているように、文の情報構造によっても大きく左右されるので、主語と拡大与格が関係を結んでいる例も実際に見られるが、やはりこれは有標の状況である。ここまでのところをまとめると、[MOVE]タイプの活動自動詞を述語とする文の拡大与格は文中のどの要素とも関係を結べないが、非[MOVE]タイプの活動自動詞を持つ文はPPが係り先になる、ということになる。⁹⁾

次に到達タイプの自動詞を考えてみよう。このタイプの自動詞は、最近とみに関心が高まっている「非対格」自動詞のグループに属する。もし、「非対格自動詞の主語はより抽象的な構造では直接目的語の位置をしめる」という非対格の仮説を認めるならば、このタイプの自動詞を述語とする文で拡大与格と主語が関係を持つのは、我々にとってはなんら問題とはならない。以上のことから、(15)は反例にならないことがわかる。

さて、ルーマニア語で [MOVE] タイプの動詞を述語に持つ文で拡大与格が認可されないのは、拡大与格が本質的に状態変化・結果志向であるのに対して、[MOVE] タイプは位置変化であり、動作志向であるからだ、という主張に対する反例の二つ目として(14)を検討してみよう。この例は二重の意味で反例を構成しているように見える。まず、主語が拡大与格と関係を結んでいるように思える（例えば、与格は赤ちゃんの母親を指す）。二番目は、先に述べたように、動作そのもので結果状態が想定できないことである。まず最初の論点だが、確かに与格は赤ちゃんの母親を指す解釈ができるが、そうではない例も存在する。

(34) Un câine i-a lătrat la ora trei de dimineața.

UN CHIEN DAT-A ABOYE A L'HEURE TROIS DE MATIN-LE

(ある犬が朝の3時に吠えて彼(女)は迷惑した)

この「犬」には不定冠詞がついており、与格との所有関係は想定しにくい。また(14)にしても与格を母親と解釈する必要は無い。つまり、このタイプの文には与格と関係を結ぶ要素がないのである。この種の文は活動動詞を述語とする文以外にも存在する。

(35) Trebuie să-i aranjez camera mea.

IL FAUT QUE-DAT JE RANGE CHAMBRE MA

(私は彼(女)のために自分の部屋を整頓しなければならない)

この例でも唯一の名詞に「私の」という所有形容詞が付いているため与格と関係を結ぶことはできない。それではこの拡大与格は何と関係を結ぶのだろうか。(14), (34), (35)に共通するのは与格は文全体の表す状況から影響を受ける、ということである(前者二つは被害、後者は受益)。ここでフランス語の拡大与格の性質を思い出してほしい。与格は二次叙述と関係を結ぶのであった(もちろん叙述中に含まれる名詞との所有関係を「とっかかり」にして、である — さらに所有関係の種類についても制約があった)。ここにルーマニア語とフランス語の接点を見いだすことができる。即ち、文中のある名詞と所有関係を結んで、いわばそれだけで文に取り込まれてしまうタイプの拡大与格が圧倒的に多いルーマニア語の中で、今問題にしているタイプは文全体、つまり叙述と関係を結ぶという点で、二次叙述と関係を結ぶフランス語の拡大与格と共通の性質を持っていると言える。ただルーマニア語には、拡大与格と関係を結ぶ要素がない、という条件のほかに、もう一つ条件がある。それは動詞の [ACT] の性格である。次の例に見られるように動詞の [ACT] 性は十分強くないといけない。

(36) ?Cocoșul i-a cântat la ora trei de dimineața.

COQ-LE DAT-A CHANTE A L'HEURE TROIS DE MATIN-LE

(鶏が朝の3時に鳴いて彼(女)は迷惑した)

(37) ?Mașina aceasta i-a făcut zgomot toată noaptea.

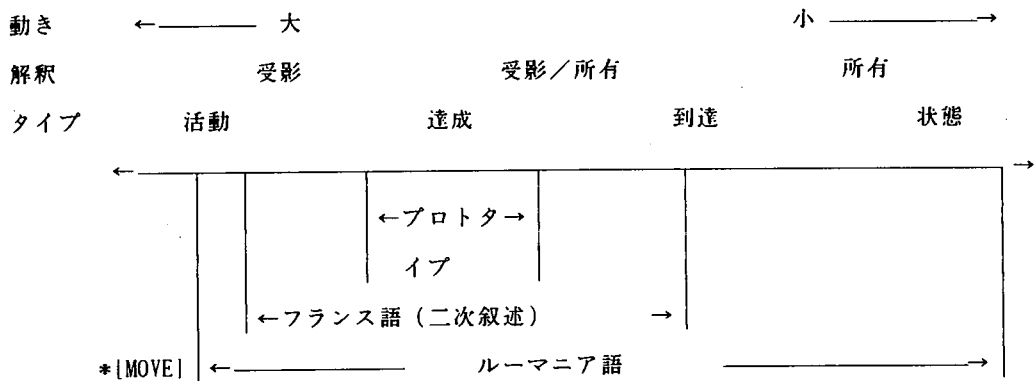
MACHINE CETTE DAT-A FAIT BRUIT TOUTE NUIT-LA

(この機械は一晩中音をたてて彼(女)は迷惑した)

犬と鶏の差は微妙であるが、(14), (34), (36), (37)を比べてみると、適格性の差は動作主性 (Agentivity) の差であることがわかる。動作主性が高い、つまり [ACT] 性が高い、という条件の所以である。一方 [MOVE] タイプにはこういう条件は無い。さらに [MOVE] と違うのは [ACT] そのものの語彙的性格である。[MOVE] の持つ [ACT] 成分は、先にも述べたように、自分の意思で位置変化を行うことによるもので、語彙的には無色透明である。それに対して “plânge”, “lătra” などは明確な語彙的意味を持っている。このことも [MOVE] タイプに比べて [ACT] 性が高くなっている原因と考えられるだろう。以上、拡大与格が叙述全体と関係を結び、受影の意味を持つ (被害か受益かは主に語用論的要因によって決まる) ケースがあり、その場合は、文中に拡大与格と関係を結ぶ要素が無く、[ACT] 性が十分強くなければならぬことを見た。これらのことを考えると、(14)も上に述べた [MOVE] の特殊性に関する主張の反例にならないことがわかる。

5. フランス語とルーマニア語の拡大与格の比較・対照 — 結論にかえて

今までしばしば述べてきたように、両語の違いは、フランス語では拡大与格に対する制約がきついのに対して、ルーマニア語ではごく一部を除いて (ie. [MOVE] タイプ) 殆ど制約が無い、ということ、それにフランス語では拡大与格は文中の所有関係にある要素を通じて二次叙述から受影の解釈を受けることが多いのに対して、ルーマニア語では、それはごく一部で、殆どの場合単なる所有者として文の中に組み入れられてしまう、ということである。しかし、拡大与格は結果志向であるという性質は両語に共通で、これが拡大与格の本質だと思われる。両語の違いは、これをプロトタイプとした場合の、周辺部への広がりの違いとして認識できる。即ち、フランス語は、プロトタイプに最も近い達成タイプを中心に、二次叙述ができる範囲で、活動タイプ、到達タイプまで領域を広げているのに対して、ルーマニア語は、一方では結果・状態を越えて単なる状態まで領域を広げ、他方では [MOVE] 以外の活動タイプまで領域に取り込んだ。その結果、受影解釈にはある程度高い [ACT] 性が必要なので、ルーマニア語では拡大与格は一部の活動タイプ以外は、意味的に単なる所有者を表すだけになり、受影解釈は “implication” として存在するようになった、と考えられる (但し、[ACT] 性の高い達成タイプでは受影も、単なる implication ではなく、所有とともに存在している)。もっとも、この implication は重要で、これの存在が、文の情報構造とともに、所有形容詞、所有代名詞との大きな違いとなっている。以上のことを結論的に図式的に表せば次の様になろう。



註

- 1) 二次叙述はこのような結果部分だけではなく、他の文にも広く見られる。例えば “John ate the fish raw.” では、ジョンが魚を食べた、という一次叙述の他に、その時魚は生だった、という、様態を表す二次叙述が存在する。Herslund(1988)は代名詞 lui/y の区別にこの二次叙述が重要な役割を果たしていると主張している（この問題に関しては林(1991, 1993)も参照されたい）。このほか、Levin and Rappaport Hovav(1995), Goldberg(1995), Takezawa(1993), 影山(1996)などを参照のこと。
- 2) [CONTROL]は、二次叙述の部分が必ずしも実現されるとは限らないが、それに向かって行為が為される、ということを表している。実現未定の二次叙述ということで、下線を破線にした。
- 3) [WITH EFFECT ON |] というのは | で表される要素に対して、ある効果・影響を与えるということの意味している。従って、全体は、「ジュールがある人の髪の毛を引っ張って、その結果、その人に対してある影響を与えた」という意味になる。
- 4) 仁田(1983)も「様変え」動詞（我々の状態変化）は典型的に結果の副詞を取るが、「位置変え」動詞（我々の位置変化）は結果の副詞を取りにくい、と述べている。
- 5) これは、Levin and Rappaport Hovav(1995) が結果構文で “Direct Object Restriction” と呼んでいるもの（結果構文の主体になれるのは D-Structure における直接目的語のみである）と大きな共通点を持っており、おおいに興味をそそられるところである。特に拡大与格が結果の部分と密接な関係を持つことを考えると、今後の課題としておおいに有望である。
- 6) 直接目的語の性質によって文全体の解釈が変わることがよくある。例えば次の(a)は動作が完了したことを表すが、(b)は動作がまだ継続中であることを表す。
 - (a) Taroo drank a beer.
 - (b) Taroo drank beer.
- 7) 状態タイプにも自動詞がある。しかし殆どの場合形容詞構文であり、本動詞も数が限定され

ているので、ここでは考察の対象とはしないことにする。

8) この“musafiru-mi”の“-mi”は与格形が接辞化して名詞に直接付いたもの、また、“mcu”は所有形容詞である。

9) 状態タイプの自動詞構文は形容詞構文が圧倒的に多く、主語が拡大与格と結び付くのは文の情報構造（主語は必ず主題になり、以下の部分はその属性記述になる）によるのではないだろうか。つまり、形容詞構文に特徴的な情報構造と、拡大与格の持つ“appartenance implicite”（拡大与格とその係り先の名詞の所有関係は予め設定済みである、というもの — Timoc-Bardy(1996)）という性質がうまくマッチしているから、と考えられる。それ以外は、拡大与格と主語の結び付きは困難ではないだろうか。例えば次の例は詩としては適格ではあるものの普通の散文としては抵抗がある。

(a) Stelele îmi strălucesc pe cer noapții.

ETOILES-LES DAT ETINCELENT DANS CIEL NUIT-GENITIF（夜空に星が輝いている）

(b) Dunarea îmi curge în pace.

DAT COULE EN PAIX（ドナウ河は静かに流れている）

“străluci”はもともと非[MOVE]タイプの活動動詞、“curge”は[MOVE]タイプの活動動詞であるが、両方とも解釈は状態である。しかしこれらを普通の散文として解釈するのは無理で、詩として解釈せねばならない。インフォーマントによると、もともと結び付かない主語と与格を無理に結び付けることによって、詩的な効果を出している、とのことである。

参考文献

Authier, J.M. & L.Reed(1992):“Case theory, theta theory and distribution of French

affected datives”, The proceedings of the tenth West Coast conference on formal linguistics, pp.27-39.

Barnes, B.(1985):“A Functional Explanation of French Non Lexical Datives”, Lingvisticae Investigationes, IV pp.245-292.

Goldberg, E.(1995):Constructions, The University of Chicago Press.

林 博司(1991):「lui/yによる代名詞化について(1)」, 『大阪外国語大学論集』6号, pp.1-24.

_____ (1993):「「à+名詞句」を受ける y と lui について — フランス語における datif と locatif」, 大橋他『フランス語とはどういう言語か』, 駿河台出版社, pp.95-119.

_____ (1996):「述語によって選択されない項 — フランス語の拡大与格の場合」, 『大阪外国語大学論集』15号, pp.15-40.

- _____ (1998): 「二次述語構文と拡大与格」, 『国際文化学研究』10号, 神戸大学国際文化学部, pp.61-92.
- Herschensohn, J. (1990): "On the Economy of Romance Non-Lexical Datives", Linguistic studies in Romance Languages, John Benjamins, pp.123-134.
- Herslund, M. (1988): Le datif en français, Edition Pecters.
- 井口容子(1989): 「拡大与格と身体の部分の所有者を表す与格」, 『フランス語学研究』23号, pp.67-73.
- Jackendoff, R. (1990): Semantic Structures, The MIT Press.
- Jones, M. A. (1996): Foundations of French Syntax, Cambridge University Press.
- 影山太郎(1996): 『動詞意味論』, くろしお出版.
- 影山太郎 & 由本陽子(1998): 『語形成と概念構造』, 研究社出版.
- Leclère, Ch. (1976): "Datifs syntaxiques et datifs éthiques", Méthodes en grammaire française, Klincksieck, pp.73-96.
- Levin, B. & M. Rappaport Hovav (1995): Unaccusativity, The MIT Press.
- 仁田義雄(1983): 「結果の副詞とその周辺」, 渡辺実編『副用語の研究』, 明治書院, pp.117-136.
- 大木 允(1989): 「il lève la tête 構文と il se brosse les dents 構文」, 『フランス語学研究』23号, pp.74-80.
- Popescu-Ramírez L. & L. Tasmowski-De Ryck (1988): "Thématicité et possessivité en roumain" Lingvisticae Investigationes, X II, pp.303-335.
- Shibatani, M. (1994): "An Integrated Approach to Raising, Ethical Datives, and Adversative Passives", BLS, 20, pp.401-456.
- Takezawa, K. (1993): "Secondary Predication and Locative/Goal Phrases", Japanese Syntax in Comparative Grammar, Kuroshiohuppan, pp.45-77.
- Tenny, C. (1987): Grammaticalizing Aspect and Affectedness, Ph.D. dissertation, MIT.
- _____ (1994): Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface, Kluwer.
- Timoc-Bardy, R. (1996): "Appartenance implicite vs appartenance explicite en roumain", Faits de langues, No.7, pp.241-250.
- Vendler, Z. (1967): Linguistics in Philosophy, Cornell University Press.